

松本忠司先生の思い出

言語センター長 永原和夫

松本先生は早稲田大学大学院でロシア文学を学ばれ、昭和32年にロシア語担当専任講師として小樽商科大学に迎えられた。その時、先生は弱冠28歳でしたから、新進気鋭の研究者としていかに将来を嘱望されていたか想像に難くありません。昭和42年に私が小樽商科大学に赴任したとき、先生はすでに大人の風格をそなえ、中堅助教授として活躍されていた。43年には教授になられ、47年から49年まで短期大学部主事を兼務された。大学紛争の最も多難な時期を無事にのりきることができたのも、その大半は常に公正に考え果敢に決断を下す、先生の責任ある態度とその侮り難い弁舌に多くを負っています。その後、昭和57年から平成4年3月に定年退官されるまで、松本先生は附属図書館長として重責を果たされた。

言語センター新設の過程でもどれほど先生に助けられたかわからない。「これはやらなければならないことです」という先生のご発言がなければ、どうなっていたかわからない局面が何回もあった。互いに理想を掲げて語り合った言語センターの理念を忘れずに地道に前進していくのが、先生への恩に報いることだと思っている。

思い返してみれば、先生とのお付き合いは長くいろいろな場でお話をうかがう機会も多かった。先生は商大の歴史に詳しく、まだ大学が小さく語学教官を蔑視する風潮があった頃の話など克明かつ辛辣で、諧謔に満ちており何度聞いても楽しかったが、それは自分に厳しい者でなければいけない言葉で、自戒の念を新たにさせられるものであった。先生は話術の大家であったから松本語録ができるほどたくさんの名文句を残されたが、何ととっても感動的なのはマクシム・ゴーリキイとの出会いである。

若い頃の先生は、このごろ学生にはもう死語となってしまった、いわゆる苦学生で、冬は雪深い山で伐採に従事し、夏には伐り倒した木を運搬するトロッコ軌道を作るという仕事をしながら文学書を読みふけていられた。後に先生のライフワークとなるゴーリキイと出会ったのはそんな時であった。その頃のことを振り返って先生は次のように書いておられる。

新聞もラジオもなく、およそ文化というものに縁遠い山奥の飯場小屋の生活。ここで私に辛うじて残された唯一のたのしみは読書であった。出稼ぎに出るときはいつも、知り合いの文学好きの青年から数冊の本を借りることにして、仕事のあいまに——青空の下で、ほの暗いランプの灯のもとで、私は読みふけたものである。そうしたなかで、私はゴーリキイの名を知った。

マキシム・ゴーリキイは、松本先生が秋田県小坂町に生まれる 61 年前の 1868 年に先生の誕生日と同じ 3 月 28 日に、ロシアはニージニイ・ノーヴゴロトで生まれた。誕生日が同じというのは偶然の一致にすぎないが、人間の一生を決める偶然だつてある。悩み多い多感な青年には『どん底』は自分のことを書いていると思えた。先生はゴーリキイを読みながら、自分の人生を追体験し、人間とは何か、生きるとはどういうことかと問い続けてこられた。それが『ゴーリキイ研究：作家への道』『ゴーリキイ文芸書簡』（全 2 巻）をはじめとする多くのロシア演劇研究としてまとめられた。最近では大作「ロシア・インテリゲンツィヤ精神史」を執筆中であるとうけたまわっている。

先生の御研究は、「新批評」華やかなりし時代に作品を分析的に読むことを教えられた私のようなものにとっては、正直いってなかなか馴染めなかった。そんな者の懸念を尻目に、松本先生は文学を生き、さっそうと演劇活動をなさり、道内だけでなく中央でも演劇人として名をなした。また多喜二記念祭実行委員長を務めるなど小樽市の文学活動をリードしてこられた。歴史・伝記的研究が再び脚光を浴びるようになった現在、先生から学ぶのがあまりに

も少なかったのが悔やまれる。戯曲だって、先生に習って演劇作りの内側から見ることを学んでいたら、もっと別の読み方ができていたろう。

先生は情熱的な人で、教室でもよく歌をうたって学生にきかせていた。私にはあれはスラブ民族の魂の叫び声に聞こえた。あの腹の底から歌う声を校舎で聞かれなくなったのは寂しい限りである。小樽商科大学の発展と語学教育の充実のために尽くされた先生のご貢献に感謝するとともに、いつまでもお元気で「大文字ではじまる人間」についてゴーリキイを語り続け、われわれを啓発して下さるようお願いし、松本先生の御退官を記念する特別号に寄せる言葉に換えさせていただく。